カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699

発行人
大水文隆

印刷所
株式会社 藤木博英社
〒850－0852
長崎市万屋町5－13
TEL 095－821－2146
FAX 095－821－2148

年頭教書

神のことばを分かち合う〝小共同体〟

大司教 ヨセフ 高見 三明

長崎教区のすべての皆様に、新年のごあいさつを申し上げます。特に「いつくしみの特別聖年」の間にいただいたお恵みを神に感謝すると同時に、わたしと教区のために祈りかつ奉仕してくださった皆様に、心より御礼を申し上げます。今年も神のいつくしみをありがたくいただき、出かけて行って分かち合い、永遠の幸いに向かって一緒に旅を続けたいと思います。

さて、今年は2月7日に殉教者ユスト高山右近の列福式が大阪城ホールで行われます。また7月7日は日本二〇五殉教者の列福150周年、同15日は浦上四番崩れが始まって150年目にあたります。今年も先祖たちの信仰を思い起こす機会が与えられます。

1 教区シノドス「公式提言」

ところで、教区シノドスで、先祖たちがいのちをかけて守り抜いた信仰を今とこれから先の時代に生きていくためにはどうすればいいのかを話し合い、「提言」としました。『教区シノドス提言』の冊子は一昨年、各家庭・各修道院に配布されました。特に第二部の「公式提言」は、必ず、しかも繰り返して読むようにしてください。もちろん読むだけではなく、実行するよう努力してください。わずか7ページですが、実行すべきことはたくさんあります。

今年はその「公式提言」の「提言2」を踏まえて、聖書を読んで分かち合う場である〝小共同体〟をつくるよう強くお願いしたいと思います。なお、これに関連したことは2009年と2010年の年頭教書、および昨年の復活教書でも述べました。

2 聖書は真理と道徳の泉、信仰の最高の基準

聖書は旧約聖書と新約聖書から成っています。そこには、神様がことばとわざによって明らかにされたご自身のこと、世界と人間およびその歴史のこと、すなわち啓示が書かれています。旧約聖書にはキリストの到来の準備、新約聖書には啓示の頂点であるキリストについて記されています。聖書は人間のことばで書かれていますが、いわば原作者である神が、ある人々を選び、霊感を与えて彼らのうちで働き、彼らを通して、ご自分の望むことだけを書き記させたものです。それゆえ「神のことば」です。つまり、救いに必要なすべての真理と道徳上の規律の源泉です。

同じ神のことばは、使徒たちによって典礼や制度や教えなどによっても説明され、伝えられてきました。それが聖伝です。それゆえ、聖書は聖伝とともに教会の信仰の最高の基準なのです。また、教会は「キリストの御からだと神のことば」の食卓からいのちの糧をいただいてきました。実に聖書は、教会にとって宣教を養い導く力であり、信者にとって信仰の力、霊魂にとっては糧、霊的生活にとっては純粋な尽きない泉です（『啓示憲章』2～4、7～11、21参照）。

3 聖書を読む

カトリック教会では、50年前まで信徒は聖書を読むよう積極的に奨められていませんでした。聖書はあまりに重要なものであるために、その解釈と説明は教導権と司祭の権限に委ねられてきました。しかし、第二バチカン公会議は、「すべてのキリスト信者」が聖書を読み、「キリストを知るすばらしさ」（フィリピ3・8）を学ぶよう、強くまた特別に推奨しました（『啓示憲章』25）。人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るすべてのことばによって生きるからです（申命記8・3、マタイ4・4参照）。

しかし神のことばを糧とするためには、それを聴いて信仰の心で受け入れなければなりません。すると、神のことばはわたしたちのうちに、いわば露のように滴り、小雨のように注がれます（申命記32・2参照）。典礼に目を向けると、キリストはご自身のことばのうちに現存しておられるので、聖書が教会で読まれるとき、キリストご自身が語られるのです（『典礼憲章』7参照）。一方、聖書を読むとき、「天におられる父は聖書の中で深い愛情をもって自分の子らと出会い、彼らとことばを交わす」（『啓示憲章』21）のです。

4 神のことばを分かち合う

「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい」（コロサイ3・16）と聖パウロは勧めています。神のことばは、それを聴く人の口と心にあります。ですから、それを実行することができます（申命記30・14参照）。みことばを聞くだけではなく、行う人にならなければなりません（ヤコブ1・22～23参照）。イエスは、「何と幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は」と声高らかに言った人に「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」と言われました（ルカ11・27～28参照）。また「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とも言われました（ルカ8・21）。

このように神のことばを祈りのうちに読み、生活と結びつけて黙想し、その実りを互いに分かち合うことによって、みことばをより豊かに自分のものにすると同時に、互いのきずなを強め、宣教と愛の行いへと促されます。この意味で神のことばは教会共同体をつくり上げ、最後には救いへと導きます（使徒言行録20・32参照）。

分かち合いの方法のうち、次の二つを挙げましょう。

(1) 聖書百週間

パリ外国宣教会のル・ドルズ（M. Le Dorze）神父様が40年ほど前に始めた聖書に親しむ方法で、あらかじめ準備された配分表に従って聖書を読み、毎週あるいは2週ごとに分かち合うというものです。各自、自宅で聖書をよく読み、感じたことを集まりで話し、他の人の話を聞き、こうして皆でみことばを分かち合います。分かち合いを重ねることによって、徐々にみことばに生かされるようになります。

(2) セブン・ステップ法

1993年、アジア司教協議会連盟（FABC）人間開発局と信徒局共催の会議は、「参加する教会」のビジョンを司牧活動において実現する行程を「アジアにおける統合的な司牧的アプローチ」と名づけました。このプログラムの中に、「小共同体」で行う福音の分かち合いの基本的方法として、セブン・ステップ法などの方法があります。これは、10人前後のグループで、7つの段階を経ながら福音のある箇所を黙想し分かち合う方法です。参加者はキリストを中心に、共同体として、祈りの雰囲気の中でみことばに触れて、行動へと向かいます。「小共同体」は、「小教区と教区における交わりと参加を促す効果的な手段であり、福音化のための本物の力です」（教皇ヨハネ・パウロ二世 使徒的勧告『アジアにおける教会』1999年、25参照）。

すでに各小教区にある〝地区〟あるいは〝班〟などの呼び方をそのままにするか、あるいはそれを〝小共同体〟あるいは〝みことばの組〟などと呼び変えるかして、みことばの分かち合いを実践していただきたいのです。「できません」ではなく、「主のおことばですから、挑戦してみましょう」という気持ちで始めてください。期待しています。

特別聖年の閉幕ミサ

〝いつくしみ〟の証し、これからも

2015年の「無原罪の聖母」の祭日（12月8日）から始まった「いつくしみの特別聖年」が、「王であるキリスト」を祝う16年11月20日、バチカンの聖ペトロ大聖堂の「聖年の扉」を閉じることによって閉幕した。地方教会ではそれに先立つ11月13日、年間第33主日に閉幕したが、長崎教区では行事日程の都合により、閉幕ミサが20日（日）14時から浦上教会で行われた（写真）。高見三明大司教の司式のもと約800人が、聖年を通していただいた恵みに感謝をささげた。

ミサの説教で大司教は、日本の信徒発見150周年を記念し開催した教区シノドスについて言及し、提言の副題に示されているように教区が一丸となって「神のいつくしみを共に生き、伝えよう」としているタイミングで特別聖年が訪れたことを振り返った。

「教区が掲げている目標と同じく、特別聖年の『主のいつくしみを受け、分かち合う』という趣旨もこれからずっと生かしていかなければならないもの」と話し、教皇が聖年公布の大勅書（5）の中で、すでにこのことを述べられていると紹介。最後に、「いつくしみの特別聖年は今日で閉じますが、むしろこれからが勝負の時です。神のいつくしみの生きた証人となるよう努めていかなければなりません。私たちが神のいつくしみを全身全霊で受け止め、他の人々に示し続けていくことができるよう共に、そしてお互いのために祈りましょう」と語った。

浦上教会の他に扉が開かれていた8つの教会（中町・滑石・相浦・平戸・青方・福江・大浦・聖フィリッポ）でも、11月13、20日に感謝ミサがささげられるなどした。

地方教会で特別聖年が閉幕した年間第33主日は、今年から「貧しい人々の日」として記念される。

独大統領、浦上を訪問

昨年11月に訪日したドイツのヨアヒム・ガウク大統領が、11月18日（金）に長崎入りし、原爆資料館や日本二十六聖人記念館、浦上教会、平和公園を訪れた。浦上では高見三明大司教が案内。大統領は、聖堂と被爆マリア小聖堂、被爆石像の庭園を30分間ほど見学し、質問をしたり熱心に見入ったりしていた。

訪問に際し、高見大司教と日本福音ルーテル教会副議長の大柴譲治牧師は、宗教改革500年共同記念企画（2017年11月23日浦上教会で開催）にドイツからの派遣を要請、日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会の各代表連署の親書をガウク大統領に手渡した。

左から高見大司教、ガウク大統領、大柴牧師

ほしかげ

新年のお慶びを申し上げます。カトリック教報をいつも楽しみにしておられる皆様に、これまでどおり、高見三明大司教様の示す方向性、教区の動きなどを的確に伝えるべく、努力してまいります▲年末に釣り納めと称し、漁船に乗って沖釣りと意気込んでいたのに、出航できずじまいという日があった。エンジンに詳しい人に漁船のエンジンルームに潜り込んでもらい、バッテリー交換となった▲エンジンルームは非常に狭く、情けないことに自分では入ることができない。申し訳ない気持ちで見守るしかなかった。経験を積み、学びは人以上に増えても、生活習慣は叙階後24年、徐々に悪化し、窮屈な場所に降りていけなくなっていた。暗くて狭い、油まみれの場所は、わたしが避けてきたさまざまな人々の生活の場のように見えた▲神の母となることを受け入れたマリアは、「お言葉どおり、この身に成りますように」と答えた。豊臣秀吉によって出された追放令に対し、高山右近は「わたしの身柄や封禄や領地のことは、太閤様の思うとおりになさってください」と答えた▲24年間、本当に「あなたの思うとおりになさってください」と自分を差し出し、運命を神に委ねてきたのだろうかと立ち止まってしまう。叙階25年目を間近にして、「あなたの思うとおりに使ってください」との思いを新たに踏み出したい。（K・N）

高山右近列福へのカテケージス ⑤

ユスト高山右近という生き方

― 学ぶ親、倣う家族 ―

列聖推進委員会　古巣 馨

◆おいでください

祖父は水方でした。島に11あった「帳内」（隠れキリシタンの呼称）の一つに属し、伝えられた儀式を水も漏らさぬ手配りで取り仕切っていました。門松、鏡餅、神棚の榊とお神酒、元旦早朝に長男が汲んだ若水で口をすすぎ、顔を洗い、直会の雑煮を食す。代々受け継がれてきた、年の初めの習わしです。手抜きはありませんでした。

水方の家に神父が出向いてきたのは、父の縁談話がきっかけでした。意中の女性を追いかけたら、父はキリストの前にいました。「私がそちらに参りますと、何かとうわさも立ちます。どうか、おいでください。」帳内仲間を気遣う祖父は、自ら執り行う儀式のいわれと真意を知りたく、神父を招きました。出向いてきたのは、座禅を組むことで知られた時の主任司祭、松下佐吉でした。松下がひたすら説いたのは、キリストの十字架と永遠の命でした。あとは、祖母の密造したホケ（焼酎）が互いの胃袋を通ると、同じ思いが五臓六腑にしみわたり、同じ顔になりました。

「ゼズス様エ御届ヲ申上奉ル御安女様方ノ力ヲ以テ　社場ノ御帳面ヲ取消シ　パライゾノ御帳面二御加エ下サレマスル様二テ謹ンテ御頼ミ申奉ル」（『寶蔵書』）この祈りで帳内仲間を弔ってきた祖父は、〝やさしきみ母〟の調べの中、司祭の手によって見送られました。父は「十字架の道行の祈り」14留すべてを諳んじて結婚式に臨みました。日本に福音が伝えられたときからの風景です。その始まりを高山右近の家族に見つけます。これは、教会の預言職（教え、伝えるつとめ）への問いかけでもあります。

◆出向いてきた司牧者たち

「わたしはもっとゆっくり教えを聞きたく、あなた様をこちらにお呼びしたいのですが、道中は敵がいて危険なので、今のところはあえてそうするわけにはいきません。その時が来るまでお待ちします。しかし、デウスの愛のために、すぐにでもロレンソ修道士をお遣わしください。彼は日本人ですから、道中は自由に旅もできますし、わたしの家族や兵士たちも説教を聞きたがっておりますから」（『日本史』第1部39章）

当時、都の論客として知られていた結城忠正、清原枝賢、高山友照（飛騨守）は、キリシタンの論客ロレンソ了斎と対峙し、イエスの福音こそ戦国の世の灯だと得心するや、3人ともガスパル・ヴィレラより受洗しました。ダリオ飛騨守は、その恵みに家族や家臣もあずからせようと必死でした。ダリオの手紙を受け取ったヴィレラは、すぐさまロレンソを高山家に出向かせます。天の露が大地をうるおすように、ロレンソの伝える福音は、家族や家臣たちに信仰を芽生えさせました。こうして、1564年6月、飛騨守の夫人マリアをはじめ、三男三女と150人の家臣が受洗するのです。その中に当年10歳になったばかりの長男、彦五郎（右近）がいました。

高槻に移ってから、高山父子はより深くキリストを学ぶ人になっていきます。21歳のとき、主君和田惟長との一騎打ちで命の淵を彷徨っていた右近のもとに、フランシスコ・カブラルを呼び寄せたのは父ダリオでした。カブラルは、細くくびれた瓶の口に一滴ずつそっと癒やしの油を注ぐかのように、十字架と神のいつくしみの福音を語り続けました。このとき、「右近は神のことを深く想い、驚くほどの成長をとげた」と、生き返った右近をフロイスは記録するのです。まず父が学び、得心した福音を何とかして子に伝えたいとの父の一念が、恵みの懸け橋となりました。そして、カテケージスが高山家をキリスト者の家族へと育てました。

1577年の記録には、高槻で4千人が受洗したと報告されています。受洗者の要理の勉強と洗礼志願者の準備も、父ダリオとユスト右近が担当しています。洗礼の日、ダリオと右近は身分に関係なく彼らの代父となり、受洗者の名前を記帳し、一人一人に洗礼名を書いた紙片を与え、神の子どもとして生きるようにと励ましています。洗礼の後も、ダリオは信者たちに祈りを暗唱させ、朝な夕な祈ることを習慣づけ、定期的にカテケージスの機会を設けています。また、信仰のために日々の信心は欠かせないと言って、ダリオは京都からろくろ師を呼び、ロザリオやメダイも作らせました。このろくろ師も後に洗礼を受けています。「いとたやすいことでござる」これは、宣教師の頼みごとを引き受ける際のダリオと右近の決まり文句として記録されています。右近が領した高槻も明石も、学ぶ教会でした。オルガンティーノ、ヴァリニャーノ、セスペデス、ペレス、ロドリゲス、モレホン……。生涯キリストを学び続ける右近のために、出向いてきた司祭たちです。

◆キリストに倣いて

死の淵にたたずみ追放の憂き目を通して、右近は貧しいキリストに倣い「降りて行く人」になっていきます。右近の霊性は、迫害を控えた教会を導く司祭たちの学びから生まれています。キリシタン時代の霊性を理解するためには、15～16世紀のヨーロッパの霊的動向を知る必要があります。当時の宣教師のほとんどが、その時代の影響を受けているからです。

14世紀後半から15世紀にかけて、西欧では「新しい信心」（Devotio moderna）という霊性運動が起こっています。それまでは、勝利のキリストを中心に置くのに対して、この「新しい信心」という霊性は、人間キリストに目を向けたものでした。玉座に座ったキリストではなく、自分を無にした謙虚なキリストを理想としたのです。それまでのキリスト教は形式的・知的傾向にあったのに対して、15世紀の霊性思想は、実践的、体験的、修徳的傾向がその特徴でした。神との深いかかわりを軸に据えること、その最も勝れた方法は、キリストの生涯を黙想し、キリストに倣って生きることでした。この霊性運動の担い手の一人が、『キリストに倣いて』の作者トマス・ア・ケンピス（1380～1471）と、ケンピスの流れを汲み『霊操』を編んだロヨラのイグナチオ（1491～1556）でした。

日本に派遣された宣教師たちは、こうした霊性運動の影響を受けていました。ですから、キリシタン時代の宣教は、黙想、観想を大事にすることから始まって、その上で宣教という課題に取り組むという方法をとっています。人目につく活動の前に、まず内的な信仰を求め、孤独と沈黙の中で、「今自分がしなければならないことは何か」を考えたのです。これは、戦に明け暮れていた当時の日本人が求めた霊性でもありました。

右近の信仰に影響を与えたのが、『キリストに倣いて』（日本では国字本で信徒向けに『こんてむつす むん地』と題し、より自由な文体に訳された）と、イグナチオの『霊操』です。1596年、天草で初版本が出版されたイグナチオの『霊操』は、原書の忠実な翻訳ではなく、日本の教会に適応することを念頭に書き直され、『スピリツアル修行』と題して出版されています。右近は、秀吉から追放の直後に有馬で、家康からの追放を受けて長崎で、生涯二度、イグナチオの「霊操」を行い、降りて行く生き方を決断し、また殉教への道を識別しています。

キリストの生涯を黙想し、キリストに倣って生きることを目指した教会は、日本の文化に適応した要理書『ドチリナキリシタン』、日本人司祭養成のための画期的なテキスト『講義要綱』、司祭不在のときの完全な痛悔とゆるしの恵みを教えた『こんちりさんのりやく』、信徒が洗礼を授ける際の『ばうてずもの授けよう』など、西欧の神学者・倫理学者をも巻き込んだ画期的な手引書を生み出しています。司祭不在の250年間、同じ信仰を手渡してきた秘訣がここにあります。学び続ける司祭たちによって導かれた日本の初期共同体、世界に類を見ない前衛的な教会でした。右近はキリストを学ぶ教会の申し子でした。

◆もう一度、学ぶ教会へ

追放地マニラを目前に、突然の嵐はジャンク船を何度も海中に引きずり込もうとしました。折れたマスト、引きちぎられた帆、死者も出てすべては水浸し、自力操行は不可能でした。海が凪ぐと、孫たちの手を借りて濡れた書物を甲板に運ばせ、一枚ずつめくって日に干す右近の姿が、このときの記録に残っています。自らの信仰を導いてくれた指南書『スピリツアル修業』でした。

「神は、わたしたちのドン・ユストをむかしのヨブのように試し、死の前から、どんなことにも動じることのないみごとな信仰を見せてくださいました。……そして彼は、自分の死を迎えるとき、あのトビアのように、神の教えに従い信仰を大事にして生きるようにと、家族に遺言しました。」右近の死に水をとったペドロ・モレホンは、キリストを学び続けた右近の最期を、家族に遺言するトビアに重ねて結んでいます。やがて、トマス金鍔次兵衛、ディオゴ結城了雪など、追放されてマニラで学ぶ日本人学生が右近の墓前に立つのです。

右近の霊性をなぞってきた長崎の教会は、親が学び、家族が倣う教会でした。かつて、長崎の教会は虐げられても、世の中から信頼をおかれました。学んだ信仰に裏打ちされた生き方が、ぶれなかったからです。年の初めにもう一度、教区シノドスが苦悶しつつ吐露した決意を思い出しましょう。「信仰を追い求め、キリスト者としての成熟を目指すために、長崎教区は、司教・司祭・修道者・信徒の生涯にわたる霊的養成を配慮し、具体的な手段を講じなければなりません」（『教区シノドス採択提言』12）。学ぶことを後回しにし、思いつきだけの手抜きした教会は、もはや新しさも頼りがいもなく、何も伝えられないのです。久しくぬくもりを知らない空席が、一つまた一つ、そっと温められる一年でありますように。

世界平和を脅かすもの

仁川を会場に日韓司教交流会

第22回日韓司教交流会が昨年11月15日（火）から17日（木）まで、韓国・仁川教区内のホテルとカトリック大学を会場に開催された。今回のテーマは「世界平和を脅かす軍需産業とメディア」。韓国から司教20人、日本から13人、司祭やスタッフを合わせ総勢45人余が参加した。

初日は金 志榮氏（慶尚北道榮州東洋大学教養学部客員教授）が「メディアと国家観」と題し、日中韓の報道の事例を挙げながら、メディアが対立をあおっている様子を指摘。2日目は『武器輸出と日本企業』の近著もある望月衣塑子氏（東京新聞社会部記者）が、日本の防衛産業の状況について話した。2日目の午後、参加者たちは江華島の平和展望台から北朝鮮を望み、大神学校で神学生たちと一緒にラテン語でミサをささげた。3日目は分団会と全体会議の後、カトリック大学芸術学部の敷地内にある小教区の教会で、信者たちと一緒に閉会ミサをささげた。

高見三明大司教は、「講話は二つとも大変リアルで重要な内容でした。平和展望台の地下と最上階には軍が駐屯しており、説明の中の『統一されたときのことを考えて云々』という表現に、統一への願望が感じられました。日本の司教協議会会長として、ミサの司式やあいさつをしたので疲れましたが、韓国の教会の力を再認識させられました」と感想を語った。

今年の交流会は、日本で開催される予定。

共同体として命を育む

生月・黒瀬の辻殉教祭

11月13日（日）午後2時から黒瀬の辻（平戸市生月町・クルスの丘公園）で、平戸地区の司祭・修道者・信徒約100人が集まり、福者西家族の殉教記念ミサが行われた。天気に恵まれ、2年ぶりに現地での開催となった。

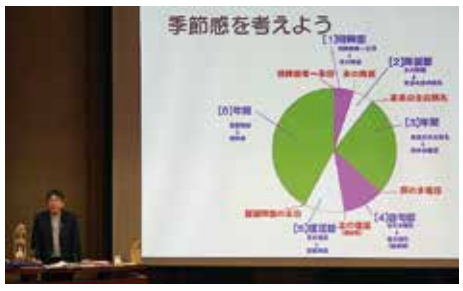
ミサの前には、ガスパル西 玄可、妻ウルスラ・トイ、長男ヨハネ又市についての丁寧な説明があり、殉教者に心を合わせて祈る導入となった。

説教は山川 忠師（上神崎主任）が務めた。「形式的に信仰を捨てたふりをしてくれれば、あなたも家族の命も助かると促されたにもかかわらず、玄可の辞世の言葉は『神を離れて命を終わらせたくない』というものでした。私たちにも、信仰共同体の中で表す信仰・命があります。個人としての努力もですが、信仰共同体として、いただいている命を深めていきましょう。」

この日は「いつくしみの特別聖年」を通していただいた恵みに感謝するよう呼び掛けられていたことから、聖体拝領後、聖ファウスティナの祈りが唱えられた。参加者たちは、神のいつくしみと殉教者の取り次ぎによって、共同体として信仰と命を育むことができるよう願い、ミサを終えた。

家庭に祈りの場を

教区家庭委、講習会を開催



待降節を4日後に控えた昨年11月23日（祝・水）午後1時から、カトリックセンターで教区家庭委員会主催による「家庭での待降節・降誕節の過ごし方を考えよう」と題した講習会が開催され、約150人が参加した。

「皆さんの家庭には、家庭祭壇がありますか。」講師を務めた中濱敬司師（同委員会委員長）の問い掛けに、参加者のほとんどが「ある」と手を挙げたが、「子どもさんの家庭では」との問いに「ある」と答えたのは一人のみ。第1部ではこの現状を受け、委員会が着目する教区シノドス提言4「祈りのあるわたしの生活と家庭生活の再構築」を軸に、異宗婚家庭の事情も踏まえながら、家庭祭壇・家族が集まって祈る場所の大切さを解説。また家庭での待降節・降誕節の過ごし方を、ワークシートを用いながら説明した。第2部では、「季節感のある祈りの雰囲気づくり」を意識するために、典礼暦が新たに始まるこの時期に講習会を開いたという目的や、家庭祭壇・祈りの場所づくりを具体的に語った。

典礼暦に応じて祈る場所を飾ることの大切さに目を向けられるように、会場入り口には、お祈りカードやクリスマス関連グッズなどの販売コーナーも設けられた。

日々の積み重ねこそ宝

上五島、39人が堅信の恵みに

上五島地区堅信式が11月13日（日）午後2時、青方教会で行われた。11小教区から中学生38人、成人1人の合計39人が堅信の秘跡を受けた。

髙見三明大司教は説教で、「何気ない毎日、それが一番の宝」という標語を取り上げ、「日常生活を振り返ってみると、一日はありふれた小さなことを繰り返すことから成り立っている。その小さな事柄の積み重ねがとても大切であるように、特別意識はしなくても、日々の小さな事柄がキリストの愛に基づいて隣人に行われるのであれば、神の子としてしっかり生きる恵みが与えられる」と説いた。

受堅者代表の入江哲太さん（中学2年、中ノ浦教会）は、「堅信の秘跡を受けた今、私たちは聖霊の賜物によって、大人のキリスト信者として生きていくための力をいただきました。洗礼によって与えられ、堅信によって固められた神様からの使命を、今から勇気をもって果たしてまいります。信仰の先輩である皆さんと共に、この宣教の道を、勇気をもって進みます」と力強くあいさつした。

司祭召命への関心願う

カトリック神学院の一日体験入学

11月12日（土）から13日（日）、長崎カトリック神学院（眞浦健吾院長）の一日体験入学が行われ、19人の小学生が参加しました。今年10月30日（日）に佐世保市の相浦教会で召命祈願ミサを行ったこともあって、佐世保地区からの参加者が多くいました。

子どもたちは、1日目には神学生たちが企画したレクリエーションを楽しみ、2日目にはミサにあずかり、また神学生の体験談を聞いて、神学院への関心を深めたようです。特に今年は、参加者と神学生がグループに分かれて、召命についてのディスカッションを行いました。そのディスカッションを通して、参加者たちは自分の召命を考えることができたと思いますし、神学生たちも同じく召命についてあらためて考えることができたのではないかと思います。

司祭・修道者の召命が減少している中で、この体験入学に参加してくださった子どもたちが、司祭召命を受けて神学院に入学してくれることを願っています。皆さま、引き続き召命のためにお祈りをよろしくお願いいたします。

神学院　大水満

希望を示す神に信頼して

平戸ザビエル祭

12月4日（日）午後2時から平戸ザビエル記念教会で、日本宣教の保護者を記念するザビエル祭が行われた。地区司祭団8人と東京から巡礼団と訪れていた後藤文雄師（神言修道会）が共同司式したミサでは、地区信徒・修道者・巡礼団、合わせて約200人が祈りをささげた。

日程の都合で参加できなかった髙見三明大司教に代わり主司式を務めた山田聡師（平戸地区長・平戸主任）は、「未来は希望と不安によって織りなされているといわれます。未来に向かって人はみな希望を募らせ、不安を減らそうとします。聖フランシスコ・ザビエルも、当時の東方宣教は不安も多分にあったでしょう。しかしイエスがきっと導いてくださるとの希望が後押ししてくれたのです。聖人を後押しした希望の大きさゆえに、不安は大したことではありませんでした。ザビエルに倣い、先祖に倣い、神が示すいつくしみの道を確固として歩みましょう」と励ました。

参加者らは、希望を示す神の計らいに、信頼を置いて歩む決意を新たにした。

大槌ベースボランティア募集

●2月9日㈭～15日㈬（1／11締切）
●3月9日㈭～15日㈬（2／8締切）

申し込みは所属小教区へ。問い合わせは教区本部事務局（松尾）まで。

FAX TEL 095・842・4450
095・842・4460

お知らせ

〈FAX番号の変更〉
純心聖母会神崎修道院の新FAX番号は、095・69・2749です。電話番号は変更ありません。

ぶどう園

▼第6回長崎キリスト教一致礼拝　1月28日㈯14時、大浦教会。

▼教皇フランシスコ平和メッセージ&神父さんとともに歌うコンサート　1月29日㈰14時、カトリックセンター・ホール。講師・松浦悟郎司教（名古屋教区）。

▼日本二十六聖人殉教記念ミサ　2月5日㈰14時、西坂公園（雨天時は中町教会）。

▼ユスト高山右近列福式　2月7日㈫12時～15時、大阪城ホール。

▼パイプオルガンコンサート&レクチャー～浦上四番崩れから150年を迎えて～　2月19日㈰15時、浦上教会。入場無料。オルガン・吉田恵、レクチャー・深堀彩香。同実行委員会主催。髙見大司教推薦。浦上教会協力。

感謝

―香典返し―

長崎カトリック神学院
●堤広文様
故マリア堤フイ様

右の方からご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

謹賀新年

大司教　髙見三明(44)

長崎大司教区

原塚正人(66)諫早市
佐藤哲夫(60)大司教館
川添猛(56)〃
下川英利(56)諫早市
山内豊(56)平戸市
山内清海(55)お告げ本部
下村徹(54)大司教館
村中司(54)長与
峰徳美(54)長崎市
三村誠一(53)大山
平野勇(53)鹿子前
野下千年(53)センター
堤好治(53)佐賀・呼子
宮川俊行(53)大司教館
小島栄(52)〃
萩原劭(50)香焼
阿野武仁(50)丸尾
川上忠秋(49)深堀
片岡久司(49)大司教館
川口清(48)五島市
浜崎靖彦(48)神崎
長谷功(48)五島市
橋本勲(47)中町
山川忠(47)上神崎
下口勲(44)大浦
大山繁(43)黒崎
松下光男(41)水主町
小瀬良明(41)佐々
村川昌彦(40)八幡町
山内実(39)真手ノ浦
諸岡清美(39)大浦天主堂司祭館
岩村知彦(35)飽の浦
鳥山邦夫(35)馬込
古巣馨(35)大司教館
橋口朝光(34)青方
山脇守(34)滑石
山田聡(33)平戸
中村満(32)福江、浜脇、井持浦
岩崎康彦(32)青砂ヶ浦
川内和則(31)鯛之浦
久志利津男(31)浦上
高野治(31)宝亀
下山盛朗(30)稲佐
鳥瀬文武(30)水ノ浦
牧山強美(28)大神学院
中村倫明(28)三浦町
福島光明(27)山田
眞浦健吾(27)小神学院
中濱敬司(27)センター
紙﨑新一(26)植松
平本義和(26)天神
葛嶋秀信(26)相浦
中濱繁喜(26)大曽
鍋内正志(25)平戸口
山村憲一(25)福岡コレジオ
岩崎晋吾(24)浦頭
下窄英知(24)センター
中田輝次(24)田平
俊治(22)大神学院
浅田照明(22)西木場
大水文隆(22)三ツ山
辻原達也(21)奈留
川原拓也(21)褥崎
松田聡史(20)桐
山本一郎(19)愛媛・今治
嘉松宏樹(19)中央協議会
中島誠志(19)大神学院
山田良秋(18)島原
川口昭人(18)太田尾
一ノ瀬輝幸(18)熊本・水俣
岡秋美(18)時津
熊川幸徳(17)イタリア
大瀬良直人(17)黒島
竹内英次(16)福岡・二日市
岩本繁幸(15)センター
尾髙修一(15)紐差
川原昭如(15)大司教館
葛島輝義(14)中町
工藤秀晃(14)木鉢
鶴崎伸也(14)神ノ島
竹谷誠(13)三井楽、貝津
前田達也(13)浦上
本田靖彦(13)仲知
岩下和樹(11)大崎
山口竜太郎(11)出津
鶴巻健二(11)木鉢（小瀬戸）
汐留義和(10)浜串
熊谷裕司(10)小神学院
谷脇誠一郎(9)俵町
山添克明(8)曽根
野濱達也(8)早岐
岩下裕志(7)浅子
中尾直通(6)佐賀・伊万里の

聖母修道院

大水満(4)小神学院
中野健一郎(3)大野
川端志範(2)土井ノ浦
小島明(1)福江
稲田伸也(1)浦上
山内啓輔(新)浦上

修道会など

●イエズス会
アギラール・J・ホセ(57)
二十六聖人修道院
松村信也(23)立山修道院
デ・ルカ・レンゾ(20)
日本二十六聖人記念館

●コンベンツアル聖フランシスコ修道会
濵田盛雄(57)湯江修道院
萩原栄三郎(52)小長井修道院
柳本繁春(52)本河内
山内春治(52)湯江修道院
瀧憲志(51)
聖母の騎士修道院
谷村達郎(43)聖コルベ志願院
松田清四朗(42)湯江
西田正(41)東長崎
山下公輝(38)小長井修道院
赤尾満治(23)
聖母の騎士修道院
平孝之(21)修練院
西本仁史(18)小長井修道院

●聖アウグスチノ修道会
マイケル・ヒルデン(43)城山
平野哲也(23)〃
チャーリー・バヌエボ・ポムセノ(6)城山

●レデンプトール会
井田明(30)愛宕
三輪周平(14)〃

●フランシスコ会
片岡仁志(54)長崎修道院
戸村悦夫(48)本原
関口七郎(40)長崎修道院
江夏国彦(37)本原

●神言修道会
上村勉(46)西町
川上進(46)長崎修道院
濵口末明(37)
聖ルドヴィコ神学院
西経一(33)長崎修道院
ジェブーラ・エウゲニウス(29)
西町
大川好洋(26)長崎修道院
ブー・カイン・トゥオン(5)
聖ルドヴィコ神学院
ペトロ・トラン・ドゥック・ディエム(3)
西町

●マリア会
池田紀行(46)海星修道院
坪光正躬(45)〃
末吉克久(34)小ヶ倉共同体
髙田裕和(24)小ヶ倉

●サレジオ修道会
ブリ・ヤン(35)愛野
ソボン・タデウス(31)
イエスのカリタス
牧野修道院

●韓国殉教福者聖職修道会
金桐旭(6)滑石

●オプス・デイ
尾崎明夫(31)長崎
木村昌平(13)〃
硲恵介(3)〃

（　）内は叙階年数

長崎北女性部

求む、仲間たち！

無料学習塾にカレー提供

子どもの笑顔を想いながら準備（時津教会）

日本カトリック女性団体連盟（日カ連）の2015年度活動テーマは「食と霊性」であった。命をつなぐ食の中に、いかに大きな霊的要素が存在するかを学んだ矢先に、教区福音化推進部の関連団体ドリームカムホームが運営する無料学習塾「ひまわり」が、食事提供を求めていることを知った。

「ひまわり」を開設する川井健蔵氏は、来塾する子どもの大半がまともに食事をしていない現実を知り、学習の前に食事をと思われたのである。

植松、水主町、諫早、東長崎、長与、時津、滑石、黒崎、出津の女性部は、交代で毎週木曜日にカレーを運ぶことにした。教会で、または女性部員宅で〝あなたが大事、あなたの笑顔が見たいから〟の想いを込めて作られた30人分のカレーは、16時半から18時の間に「ひまわり」に運ばれ、その日集う子どもたちに提供されている。

この活動は、長崎県初の子ども食堂としてマスコミに取り上げられたこともあり、「ひまわり」の存在も世間に知られるようになった。結果、物資やお金の援助を受ける機会も増えたが、マスコミが集まれば子どもが退（ひ）いていくという現象も生んだ。それでも川井氏は毎週木曜日に「ひまわり」を開け、カレーを作って待っておられる。子どもが来ない時は、そのカレーを持って子ども宅へ配達しておられる。

全国でも貧困率が高い長崎である。貧困の連鎖を断ち切るために教育を与えたい。しかし教育の前に、おなかを満たしてあげたい。まさにミゼリコルディア（いつくしみ）の心を生きる活動を今後も続けていきたいと願う北地区女性部である。今の9小教区が12小教区に増えれば3カ月に一度、16小教区に増えれば4カ月に一度のカレー当番である。求む！　他地区小教区の仲間たち!!

長崎北地区女性部
部長　松本 惠

歩み支える〝祈りと証し〟

浜串教会、献堂50周年を祝う

昨年7月に献堂50周年を迎えた浜串教会（主任司祭、地区司祭団、地区小教区代表、修道者、所属信徒らは、半世紀にわたって、祈りの家とそこに集う共同体を支えた神に感謝をささげた。

浜串教会の起源は、迫害を逃れて樫山地区から小舟で来た人々が浜串集落に住み着いたことに端をなす。初代聖堂の老朽化と信徒数の増加により、松本長太郎師の時代1966年に、現在の場所に敷地を求め聖堂を建立。近くの港口には、希望の聖母像が漁船の航行を見守るように立つ。

50周年に合わせ、5月には新しい聖櫃を設置し、10月には教会の鐘の改修と自動化設備を導入。記念ミサの始めに、鐘と自動設備の祝福式が行われた。

ミサ後の感謝式では、来賓祝辞、功労者表彰が行われた。浜串教会信徒代表の竹内若子さんは、あいさつの中で「浜串教会の歩みの中には、歴代の神父様方、シスター方、信徒たちの真心からの祈り、信仰の証しがたくさん詰まっている」と感慨深く述べた。

五島下女性部

親睦の花 満開

小学生も奮闘、ソフトバレー

小春日の昨年11月13日（日）、下五島地区評議会主催のスポーツ大会が行われました。今年は3年に一度巡ってくる球技大会。女性部の種目はソフトバレーボール。各小教区の代表10チームが、五島市中央公園市民体育館に集合しました。

神の愛を求めるがごとくボールを追い、わが子におくる愛の鞭にも似たアタックをたたき込み……数々の熱戦が繰り広げられました。参加することに意義ありの大会ですが、人数をそろえるのに困難なところもあります。それでもコートに立つ会員の笑顔は、誰もが輝いていました。

優勝は毎回無敵の浦頭小教区。2位のシスターズ（お告げのマリア修道会）の活躍もすばらしく、3位は三井楽小教区。小学生の選手もいて、女性部の特色が生きている大会になったと思います。

奈留教会　葛島志代美

高齢者・障がい者に優しい教会へ

――船越教会

船越教会（鹿子前小教区）は、7月から10月にかけて、教会内陣および聖堂の改修を行いました。

改修のきっかけは、平野 勇主任神父様の「教会玄関で高齢者が靴の履き替えに大変苦労されている。また、車いすなどでミサに来られた方が教会内に入れないので、聖堂内のバリアフリー化を検討できないか」との相談でした。建設資金の蓄えもない中、評議会・総会・臨時総会などを開催しながら、1世帯10万円の拠金をお願いし、改修を決定しました。

聖堂内のバリアフリー化・新祭壇設置・玄関改修など、信徒の皆さんのご協力とご支援のもと、いつくしみの特別聖年期間中に改修を終えるよう行ってきました。

10月23日（日）佐世保地区長の葛嶋秀信神父様、ならびに多くの神父様方の参加のもと祝福をいただき、ミサ・祝賀会を行いました。

今後も信徒が新しい教会に集い神に感謝しながら、信仰とお祈りが後世に引き継がれていく教会づくりを目指したいと思います。ご支援ご協力をいただいた皆様、ありがとうございました。

信徒代表　赤波江利秋

短信

〈愛宕教会で祈りのリレー〉

毎月11日に九州各地の教会を会場に行う「震災のための祈りのリレー」が、11月11日（金）は愛宕教会で実施された。これは東日本大震災後、福島出身のブラザーの呼び掛けで始まったもので、震災1カ月後の4月11日から毎月行っている。会場に来ることができない場合も、時間を決めて自由な場所で祈りに参加できる。12月11日㈰は新田原教会（福岡）で、1月11日㈬は笹丘教会（福岡）を予定。参加希望の方は、Br.阿部（聖パウロ修道会）のメールへ。fr05abe19ko@yahoo.co.jp

〈木鉢教会で熊本地震被災者支援のミニバザー〉

木鉢教会は11月13日（日）、信徒会館と教会周辺でミニバザーを開催した。これは信徒と地域の方々との交流を深めるとともに、バザーの収益金を熊本地震被災者支援に充てることを趣旨に行われたもの。当日は食べ物の販売や福引抽選会などがあって大変にぎわい、後日、収益の20万円が被災地に送金された。

〈教区評議会女性部が神学生養成援助献金を贈呈〉

11月23日（水）18時、教区評議会女性部（五島忍代表）の各地区代表ら9人は、担当司祭大山 繁師と共に大司教館を訪れ、髙見三明大司教に神学生養成援助献金として762万1126円を渡した。

〈第38回世界連邦平和促進全国宗教者・信仰者福岡大会〉

世界連邦日本宗教委員会主催の同大会が11月25日㈮、「海の道から導かれた世界平和への智慧」をテーマに宗像大社（福岡）で開かれ、長崎から髙見三明大司教（同委員会名誉代表）らが参加した。

〈平戸地区評議会が神学生らへ援助物資届ける〉

11月27日（日）10時頃、平戸地区評議会（松本久幸議長）の役員ら6人が長崎カトリック神学院を訪れ、神学生らのために同地区の各小教区が集めた援助物資（米・野菜・日用品など）と寄付金を届けた。純心聖母会とお告げのマリア修道会の志願院などにも贈った。

〈第25回子ども聖歌の集い〉

12月4日（日）中町教会で行われ、長崎3地区から14小教区14組の子どもたちが参加した。優秀賞は時津、黒崎、滑石の3小教区。当日集められた献金28万6689円は、熊本地震被災地支援として福岡・大分両教区に送られた。

クペルチノ 浜口宏衛（ひろえ）修道士

（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）

11月18日、心不全と肺炎のため逝去。85歳。

1931年2月8日五島市平蔵町生まれ。同年2月27日浜脇教会で受洗。55年8月17日聖母の騎士修道院入会。59年5月17日初誓願宣立、63年3月25日終生誓願宣立。同年4月聖母の騎士修道院、70年1月小長井修道院。2012年4月有料老人ホームひまわり入所。

長年にわたり小長井修道院の森林の管理を行い、その傍ら、聖母の騎士園の手伝いなどもした。明るく、誰とでも話をする修道士だった。

葬儀・告別式は11月20日、同会日本管区長の竹内昭彦師により本河内教会で行われた。

マリー・クレメン 新井 竹修道女

（至聖贖罪主女子修道会）

11月27日、心不全のため長崎市の介護老人保健施設サンブライト愛宕で逝去。90歳。

1926年11月4日生まれ。長野県出身。55年4月10日鎌倉レデンプトリスチン修道院に入会。58年5月1日有期誓願宣立、61年5月2日荘厳誓願宣立。

長崎教区とレデンプトール会の要請を受けて59年に創立された長崎修道院に、62年2月10日鎌倉から派遣され、長年にわたり祭服を作る仕事に従事した。晩年には病気の重荷を負いながらもその苦しみを神にささげ、奉献生活を全うした。

葬儀・告別式は11月29日、長崎レデンプトリスチン修道院聖堂で行われた。

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社　〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268

カトリックセンター前　TEL 095-845-6175
医療法人 平田クリニック
院長 ヨゼフ 平田哲也
内科・循環器科・入院可
通所リハビリテーションあり

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役 ヨハネ 西村 勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

人と人の絆を大切に・ご葬儀のご相談は
メモリードホール・典礼会館・中央斎場
長崎・諫早・大村・佐世保
株式会社メモリード　事務局 ペトロ 田川慶司
0120-44-6666

白蟻調査無料・駆除予防工事5ケ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者 マリア 大島睦子
（〒850-0811）長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095－822－8436
FAX 095－822－8488

石碑
文字彫刻
墓地工事
リフォーム
墓地分譲
長崎石彫（ながさきせきちょう）
ヨゼフ 岩永 博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町6-17　岩永ビル